

ネアンデルタール人の絶滅とホモ・サピエンスの 存続に関する心理学的考察

○清重友輝¹・西本素江²・中塚善次郎¹

(¹ひびきのさと人間精神学研究所・²徳島市城西中学校)

問題と目的

人間の生物学的な種としての学名はホモ・サピエンスであり、和名はヒトである。ヒトに最も近縁な人類はネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルターレンシス）であるが、彼らは約4万年前に絶滅した。なぜヒトだけが生き残ることができたのか。これを明らかにすることは、人間という存在の根底を知ることにもつながる。

現状では、このテーマは主に生物学や考古学、解剖学といった見地から研究が進められているが、研究対象がヒト（＝人間）である以上、心理学的見地からの考察を欠かすべきではないと考える。本研究では、独自の心理学理論に基づき、ホモ・サピエンスの存続理由について考察を行う。

人間精神の心理学モデル

中塚（1994）は、人間の精神機能の構造的かつ包括的な理解を意図し、「人間精神の心理学モデル」を構築した。これは、「自己」（自分に閉じた心）と「他己」（他者に開かれた心）という二つのモーメントに、個人的－集合的無意識、情動－感情、感覚－運動、認知－言語、自我－人格の、五つの精神機能領域を想定したものである。そして、このモデルを支える哲学的心理学理論を「自己・他己双対理論」と名付け、様々な研究に応用してきている。

考察

ネアンデルタール人の絶滅とホモ・サピエンスの存続の理由に関する仮説には、①両者間の闘争でホモ・サピエンスが勝利した、②ホモ・サピエンスのほうが多くの子孫を残すことができた、③言語の使用で生存競争を有利に進めた、などの説がある。最も有力視されるのは、④ホモ・サピエンスのほうが知的能力が高かったために、厳しい環境下でも生存できたという説である。ホモ・サピエンス（＝知性人）という学名からもわかるとおり、人間という存在の本質を知的能力の高さに認めようとする考えは根強く存在する。①から③の説にしても、実質的には知的能力の高さをベ

ースに語られることが多い。

だが、近年における研究の進展により、ネアンデルタール人の知的能力は、ホモ・サピエンスと比較しても決して低いものではないことが判明してきた。そして、それは同時に、単純な知的能力の高さが、ホモ・サピエンス存続の決定的な要因になったとは言えないことを示唆している。

それでは、両者の差はどこにあったのか。注目すべきは、両者がつくった社会集団の規模の違いである。ネアンデルタール人の社会は家族単位の小規模なものであったが、ホモ・サピエンスは、数百人単位の大規模な集団を形成していた。ホモ・サピエンスは、大規模な集団の中で互いに協力することで、道具や技術を飛躍的に進歩させることができ、また厳しい状況に陥っても、積極的に助け合うことで、生活の安定を図ることができた。こうした、集団性の高さや相互補助の強さこそが、ホモ・サピエンスが存続できた最大の要因と考えられるのである。

そして、最も重要なのは、そうしたホモ・サピエンス特有の集団性の高さが、何に由来するかという点である。中塚（1994）の理論に従えば、人間同士の結びつきは、認知－言語機能（あたま）の働きではなく、情動－感情機能（こころ）の働きによって作られる。特に重要な役割を担うのが感情機能の働きであり、これは「他者の心を感じるこころ」と表現することができる。

他者の喜びや悲しみを我が事のように感じ、他者と情動を共有することで、親近感や信頼を得る。そうして作られた心のつながりが強い連帯感や結束を生み、大規模な集団を形成し、維持する原動力になったと考えられる。ホモ・サピエンスがネアンデルタール人と決定的に異なるのは、知的能力の高さなどではなく、「他者の心を感じるこころ」をもつ点にある。それこそが、ホモ・サピエンスが厳しい環境下でも存続できた最大の要因であり、人間という存在の根幹であると考えられる。中塚善次郎（1994）人間精神学序説。風間書房。